

YOKOHAMA商工月報 第480号 昭和25年7月13日第3種郵便物認可 平成2年2月1日発行(毎月1回1日発行)

# YOKOHAMA 商工月報

FEBRUARY 1990  
NUMBER 480  
横浜商工会議所

2





# 近代造船工業の 幕開けを担った船匠

番外編  
その2

## 渡辺金右衛門・忠右衛門父子



▲渡辺忠右衛門

今回の番外編は渡辺船渠の創業者渡辺忠右衛門のご遺族とのめぐり会いから始める。本誌に渡辺忠右衛門を載せたのは1986年11月号(通算441号)。その翌々年の春、渡辺戊申(榊)専務取締役・渡辺淳氏の訪問をうけた。その要件は「当社創立80周年に当たり、本誌の渡辺忠右衛門編をぜひ社誌に転載したい」という申し出であった。うかがえば専務は忠右衛門から数えて四代目であり、現在のご尊父清忠氏が三代社長であるという。私は心よく承諾するとともに、さらに詳細な歴史的調査をおすすめした。

### ■金右衛門らが戸田号を建造

なぜなら、忠右衛門の父渡辺金右衛門といえは、わが国最初のスクーナー船=西洋式帆船戸田号の建造に際し、造船世話掛を命ぜられた、いわゆる7人の船匠のひとりで、近代造船技術を日本で最も早く体験的に修得した先駆けである。なのに、この父子については十分に評価されていなかったからである。戸田号とは嘉永7(1854)年、東海大地震による津波で大破し沈没したロシア使節ブチャーチンらが乗っていた軍艦ディアナ号に代わって、翌安政2年に西伊豆の戸田村で、約500人のロシア人を帰国させるためにロシア士官と日本人船匠との技術協力で作った、歴史的なスクーナー船である。この建造過程において金右衛門らの船匠は、いち早く西洋の先端造船技術を学びとり、続いて同

年に幕命で「君沢型」と称する同型のスクーナー船6隻を、今度は彼らの独力で建造した。実に歴史的快挙であり、彼らによってまさに日本の近代造船工業の口火が切られたのである。さらに金右衛門ら4人は、安政3年には幕命により石川島造船所へ技師として派遣され、近代造船工業の第一線に立ってその先端技量を発揮したのである。

この先端技術者金右衛門の強い影響を受けて少年期を過ごした忠右衛門は、15歳となった文久3(1863)年、上京して憧れの石川島造船所に入った。この年、石川島でわが国最初の軍艦、千代田形の建造が始まり、彼の目はいやおうなく近代技術へと向かった。もちろんこれは、彼の能力を見込んだ父親の斡旋によるものであったろう。だが石川島時代に、父子がどのように同居していたかなどは定かでない。忠右衛門のご令孫たちの話だと、祖父はあまり父金右衛門



▲渡辺亮平

のことを語りたがらなかったという。忠右衛門は性来独立心が強かったようで、3年目にはひとりで横須賀造船所に移り、フランス人技師のもとで新技術を修め、新進の造船技術者として一本立ちしようとしている。父は子の将来を期待していたにちがいない。

### ■高島町に造船所を創業

父金右衛門は明治7(1874)年8月22日、60歳で死去した。息子のところで亡くなったのかよくわからない。しかし忠右衛門は34歳になった明治15年、亡父を追善すべく戸田村の菩提寺蓮華寺に立派な墓所を建立し納骨している。時に彼は三菱会社横浜鉄工所の技手であった。そして明治32(1899)年彼は父の果たせなかった夢を実現し、市内高島町5丁目川岸に渡辺造船鉄工所を創業。続いて同41年に東神奈川の地先海岸2,400坪を埋め立て、ここ渡辺町に2,000トン級の近代的ドックを建設した(写真参照)。

この41年に彼は埋め立て地などの不動産を管理する部門を設けた。現在の渡辺戊申(榊)の前身である。ここにいたり、彼は横浜の地に骨を埋めることを決心し、本籍を戸田村から移した。現在、同社および渡辺家は神奈川区台町にある。

現在戸田村には洋式造船発祥の地として村立の造船郷土資料博物館があり、村誌『ヘダ号の建造』その他も公開している。が、ともに7人の船匠を顕彰する中で、渡辺父子についてのそれが乏しい。私の2度にわたる現地調査においても、村の関係者からはかえってその資料不足を訴えられることが多かった。その後、私は渡辺戊申の会長・社長から詳しい聞き取り調査を進めた上で、ここに番外編として父子の先駆的足跡を再び収載した。今回、渡辺家から発見された忠右衛門とドックの写真などは貴重で、ぜひ博物館や村誌にも提供したいと考えている。

### ■造船業の発展に貢献

横浜は国際港都として、明治以来、造船・船舶事業を重要産業としていた。その中で渡辺船渠の果たした役割は前回述べたように軽視できない。忠右衛門は英仏人の技師に直接仕込ま

ただけあって、両国語にも通じ、ドックに入る修理船の外国人を非常に歓待し、国際交流につとめていた。工場経営も積極的で、自前で木型工場・鋳物工場から製罐・仕上・旋盤・銅工・塗工・鍛冶工などの一貫工程を設け、内部装置もできるだけ西洋式をとっていた。研究心も旺盛で、実験場を設け、推進効率や流体力学にもとずいて水切りのいい船の開発をし、郵船会社からは絶対の信用を得ていたという。Y校端艇部からの注文には、彼の技能を傾けて新艇3隻を建造している(明治35年)。それだけに自信家の独



▲渡辺ドック(明治43年7月14日)

裁型経営者であったが、とくに戸田村出身の若者を工員として引き受け、彼らに長屋も建て夜学にも通わせ、特技を磨くことを奨励した。村への貢献度は少なくなかった。最も信頼していた戸田出身の支配人鳥沢福松の月給は、明治42年で55円であった、という辞令が残されている。ご令孫の話によると、律義で厳格だったが、自らにも厳しく勤勉な祖父であったという。反面、西洋好みのモダンなおじいちゃまでもあったようである。

7人の船匠の後継者中、忠右衛門は最も技術者の企業家のひとりであった。そして明治・大正・昭和へと、その造船事業を継承させたロマンのある事業家であったのである。

(付記) 本稿の取材に当たっては渡辺戊申(榊)の社長渡辺清忠・専務淳氏とご家族はじめ、戸田村の博物館長佐藤守一氏、文化財専門委員齊藤弘士氏および鳥沢福松のご遺族鳥沢勝恵氏とご子息福松氏(現戸田村助役)や、渡辺船渠二代目社長亮平の実家齊藤家の当主淑郎氏と関為弥氏(土肥町商工会長)など多くの方々のご協力を得た。この機会に記して感謝の意を表します。